

大学受験の捉え方が学校適応感に及ぼす影響

—不本意入学に着目して—

新畑 歩美¹⁾・原口 雅浩²⁾・江村 理奈²⁾

要約

本研究の目的は、大学入学時の本意度と大学受験の捉え方が学校適応感に及ぼす影響を検討することであった。大学1年生98名を対象に、入試区分や志望順位といった大学受験の経験、大学入学時の本意度、大学受験の捉え方、学校適応感について、2021年7月にWeb調査を行った。重回帰分析の結果、学校適応感に影響する要因として、本意度と達成・成長経験が選択された。さらに、単純傾斜分析の結果、不本意入学者であっても大学受験を自分の成長とつながるものだと捉えていると、学校適応が良い可能性が示された。

キーワード：不本意入学、学校適応感、大学受験の捉え方

問題・目的

文部科学省(2021a)の学校基本調査によると、大学・短期大学への現役進学率は、平成30年度54.8%、令和元年度54.8%、令和2年度55.9%となっており、二人に一人が大学に進学していることが分かる。このように現在は、少子化および大学入学定員拡充の影響により、大学を選ばなければ進学希望者のほとんどは大学に入学できるようになっている(安達・安達, 2019)。しかし、文部科学省(2021b, c)の「令和2年度国公立大学入学者選抜実施状況」と「令和2年度公立短期大学入学者選抜実施状況」によると、志願倍率は国立大学3.7倍、公立大学5.0倍、私立大学9.2倍、公立短期大学2.1倍、私立短期大学1.3倍となっている。大学受験は、我が国において自分の将来を方向付ける重要な分かれ道の1つであり、長時間の集中や緊張が強いられるため、大きなストレス経験となりうるものである(東, 2004; 富田・菊池・安藤, 2017)。

大学への進学率の上昇に伴い、我が国の大学中途退

学者は年を追って上昇傾向にある(大隅・小塩・小倉・渡邊・大崎・平石, 2013)。大学中途退率は2009年度2.41%、2012年度2.65%、2020年度2.50%となっている(文部科学省, 2014; 文部科学省, 2021d)。中途退学者増加の背景には、心理的要因としての大学生の適応力の低下があると考えられる(山田, 2006; 中村・松田, 2012)。実際、大学受験を乗り切り、大学に入学したとしても毎年多くの大学生がその後不適応を起こして大学を去っていくといわれている(樋口, 2007)。

安達・安達(2019)は、大学入学時に新入生が直面する課題として、大学という新しい環境に現実的に適応することを挙げている。学生にとって大学という新環境への移行は学業や対人関係、生活リズムなど日常生活のさまざまな領域での変化を伴うものであり、心理的成長を促す機会となりうると同時に心理的な危機をもたらす可能性がある(大隅他, 2013)。さらに、大学への不適応が続くことで、不登校になり退学へと発展する例も多いため、新入生を入学後の早い時期に適

1) 久留米大学大学院心理学研究科

2) 久留米大学文学部心理学科

応させることが望まれている（野波・近藤・玉本, 2012）。

不本意入学の学生は入学後早期の段階で、不登校につながりやすく（松高, 2017）、大学新入生の不本意入学が、休学や早期の進路変更（転学・退学）となっていくといった不適応感につながっていくことが指摘されている（山田, 2006）。

不本意入学とは、学生が自身の希望ではない大学に不本意ながら進学すること（小林, 2021）を指す。小林（2000）は、不本意入学の類型について5つの型があるとしている。具体的には、第一志望の学校に不合格で第二志望以下の大学に入学をした第一志望不合格型、合格可能性だけを重視して受かる大学に入学した合格優先型、自分の興味・適性よりも資格取得など就職の有利さを優先した就職優先型、自宅から通学できる、学費が安いなど経済的・地理的事情が優先された家庭の事情型、勉強に特に興味はなかったが、親から進学を勧められた、就職ができなかったなど学歴を得ることを優先させた学歴目的型の5つである。大隅他（2013）も、第一志望の大学に合格できなかったものは入学時点において基本的に不本意入学とみなすことができると述べている。

しかし、竹内（2020）は不本意入学について、第一志望校が不合格だったからと言って不本意入学であると判断することには疑念が残ると指摘している。加えて、小林（2000）によると、不本意入学における「不本意」には、本人の気持ちに関係している。例えば、入学した大学が第一志望校でなかったとしても、その個人がどこの大学でも入学できればいいと考えていれば、それは不本意入学とは言えない可能性がある。これらの知見を踏まえて、本研究では不本意入学を「第一志望ではない大学へ、入学時に本意と感じていない状態で入学すること」と定義する。

ところで、近年ではストレスフルな状況に耐え、そこから回復する際にポジティブな変容を生じうるという側面があることが指摘されている（Colhoun & Tedeschi, 2006 宅・清水監訳, 2014）。千葉（2020）は、ストレスフルな体験からポジティブな影響を見出すという考え方の概念整理を行い、共通因子として「人間関係の向上」と「自分の強さの発見」の2つを挙げている。この知見からは、ストレス経験に対して自分の強さを発見できるような捉え方をすると、個人に対してプラスの影響を及ぼすことが予想される。堀井（2018）は、大学生を対象に自由記述で大学受験の捉え方を調査し、大学受験に対して達成感を抱き、自分の成長につ

ながっているものとして捉えていることを示す達成・成長経験という捉え方を見出した。つまり、大学受験がストレスを感じる経験であるからと言って、必ずしもマイナスのとらえ方をするというわけではない。さらに、宮田（2015）は受験期の困難感の対処プロセスと現在の個人に及ぼす影響について複線径路等至性モデルによって分析した結果、大学受験について、合否に関係なく「成功体験」と認知できると、入学後の学生生活や性格形成にプラスの影響を及ぼすことを推察している。これらの知見から、大学受験を肯定的な経験であると捉えることは、個人にとってプラスの影響を及ぼし、学校適応においては適応を保持する要因となりうると考えられる。

以上を踏まえて本研究では、大学入学時の本意度と大学受験の捉え方が学校適応感に及ぼす影響について検討することを目的とした。さらに、大学入学時の本意度に入試区分や、志望順位といった大学受験の経験がどのような影響を及ぼすかについても検討を行った。

方 法

調査協力者

A大学の大学生144名（男性76名、女性66名、その他2名）を対象に、調査を行った。このうち、不備のあった22名、努力の最小限化を検出する項目に対して教示と異なる回答をした8名、1年生以外であった16名を除いた大学1年生98名（年齢18～21歳）を分析対象者とした。性別は男性48名、女性49名、その他1名であった。

調査時期

2021年7月に調査を行った。

質問紙構成

1. フェイスシート

学年、学部・学科、性別、年齢を尋ねた。学部・学科は、A大学にある学部・学科に合わせた選択肢から、1つ選択してもらった。性別は男性、女性、その他の中から1つ選択してもらった。

2. 大学受験の経験

浪人経験の有無、在籍大学を受験した入試区分在籍大学に合格した入試区分、在籍大学の志望順位を尋ねた。

浪人経験の有無は、浪人経験はない（現役進学）、浪人経験が1回ある（一浪をして大学進学）、浪人経験が2回以上ある（二浪以上して大学進学）の中から1つ

選択してもらった。

入試区分は、A大学の入試区分に合わせた選択肢から、当てはまるものを全て選択してもらった。

志望順位は、第一志望、第二志望、第三志望、それ以下の中から1つ選択してもらった。

3. 在籍大学について

現在在籍している大学に入学した理由、在籍する大学に対する入学時の本意度を尋ねた。

入学した理由は、小林(2000)の不本意入学学生の類型を参考に選択肢を作成し、使用した。第一志望の大学が不合格だったから(以下、第一志望不合格)、(当時の自分の学力と照らし合わせて)合格可能性が高い大学だったから(以下、合格可能性高)、資格取得や就職に関して有利だと思ったから(以下、資格・就職有利)、経済的(学費が安い)・地理的(自宅から通える)な家庭の事情があったから(以下、家庭の事情)、勉強に特に興味はなかったが、親から進学を勧められたことや、就職ができなかったから(以下、親の勧め)、その他の中から当てはまるものを全て選択してもらい、その他の場合は自由記述を求めた。

入学時の本意度は「A大学に入学する時点で、『A大学に入学すること』に対してどれくらい本意でしたか。」という教示文に対して、本意、まあ本意、やや不本意、不本意の中から1つ選択してもらった。

4. 大学受験の捉え方

堀井(2018)の大学受験捉え方尺度を使用した。「達成・成長経験」12項目、「後悔経験」8項目、「無意味経験」4項目、「苦痛経験」3項目、「遠い過去の経験」2項目の5下位尺度29項目から構成されている。それぞれの項目について、自身の大学受験の経験にどの程度当てはまるかを「1. 全く当てはまらない」「2. あまり当てはまらない」「3. どちらともいえない」「4. やや当てはまる」「5. とても当てはまる」の5件法で回答を求めた。

5. 学校適応感

大久保(2005)の青年用適応感尺度を使用した。「居心地の良さの感覚」11項目、「課題・目的の存在」7項目、「被信頼・受容感」6項目、「劣等感の無さ」6項目の4下位尺度30項目から構成されている。それぞ

れの項目について、今の大学生活にどの程度当てはまるかを「1. 全く当てはまらない」「2. あまり当てはまらない」「3. どちらともいえない」「4. やや当てはまる」「5. 非常によく当てはまる」の5件法で回答を求めた。大久保(2005)は、すべての質問項目の文頭に環境を指定する文(例えば、学校において)をつけて提示するように述べている。そのため、本研究では、「大学において」という文を、全ての質問項目の文頭に付け加えた。

6. 努力の最小限化を検出する項目

三浦・小林(2018)を参考に、Directed Questions Scaleを大学受験の捉え方と学校適応感の設問の途中に1項目ずつ挿入した(項目例:この設問では一番左の(1)を選択してください)。

手続き

調査はGoogleフォームを使用して実施した。対面で行っている授業の際に、調査協力者に対して本研究の趣旨、倫理的配慮についての説明とGoogleフォームのQRコードとURLを記載した文書を配付した。配付後、2週間程度の期限を設けて、調査協力者の都合のいい時間に回答してもらった。所要時間は10分程度であった。

なお、本研究は久留米大学御井学会倫理委員会(研究番号:422)の承認を得ている。

結 果

基礎統計量

本研究の統計分析には、HADver.17.202(清水, 2016)を使用した。表1は性別、浪人経験の有無、志望順位、入学時の本意度、入試区分について、分析対象者の人数をまとめたものである。入試区分においては、面接や小論文といった学力試験以外も行う入試区分を推薦入試とし、学力試験のみを行う入試区分を一般入試とした。

表2は入学理由の個数をまとめたものである。「自分の興味がある分野にピッタリだったから」「心理学に興味があったから」「本学科で研究したいことがあったから」の3つは、その他の自由記述にて書かれ

表1 各項目の分析対象者の人数(N=98)

性別			浪人経験の有無			志望順位				本意度				入試区分	
男性	女性	その他	無	1回あり	2回以上あり	第一志望	第二志望	第三志望	それ以下	本意	まあ本意	やや不本意	不本意	推薦	一般
48	49	1	92	5	1	47	20	22	9	39	34	17	8	38	60

ていた回答である。この3つについては、内容から勉強内容が自分の興味とあっていたので（以下、興味関心有と表記）とまとめることとした。

表2 入学理由の回答個数（複数選択可）

入学理由（個）	
第一志望不合格	45
合格可能性高	39
資格・就職有利	22
家庭の事情	21
親からの勧め	1
自分の興味がある分野にピッタリだったから	1
心理学に興味があったから	1
本学科で研究したいことがあったから	1
合計	131

表3は大学受験の捉え方の下位尺度ごとの平均と標準偏差、表4は学校適応感の総得点および下位尺度ごとの平均と標準偏差を示したものである。

大学受験の捉え方では堀井（2018）と比べて、達成・成長経験の得点はほぼ同じで、後悔経験、無意味経験、苦痛経験の得点は本研究の方が高かった。

学校適応感では、大久保（2005）の男女別平均値と比べて、被信頼・受容感と劣等感の無さの得点はほぼ同じで、居心地の良さの感覚と課題・目的の存在の得点は本研究の方が高かった。

表3 大学受験の捉え方の平均と標準偏差（N=98）

	達成・成長 経験	後悔 経験	無意味 経験	苦痛 経験	遠い過去 経験
M	3.52	3.51	2.22	2.73	2.89
SD	0.88	0.96	0.78	0.96	0.99

表4 学校適応感の平均と標準偏差（N=98）

	居心地	課題・ 目的	被信頼・ 受容感	劣等感の 無さ	総得点
M	3.47	3.85	2.87	3.62	3.47
SD	0.88	0.78	0.89	0.69	0.68

変数の要約法

学校適応感の下位尺度得点に対して、主成分分析を行った（表5）。分析は相関行列をもとに行い、累積説明率65.6%から、1成分を採用した。そこで、本研究では、学校適応感を総得点で分析を行った。

表5 学校適応感の主成分分析の結果

下位尺度	学校適応感	共通性
居心地	.93	.87
課題・目的	.85	.72
被信頼・受容感	.84	.71
劣等感の無さ	.57	.33
説明分散		2.62
説明率		65.6

本意度と志望順位の関連の検討

表6は、本意度と志望順位を組み合わせた人数を示したものである。本意度と志望順位の関連を検討するために、カイ二乗検定を行った。また、効果量として、Cramer's Vを算出した。

カイ二乗検定の結果、両者の間に有意な関連が見られ（ $\chi^2(9, N=98)=110.44, p<.001, Cramer's V=.61$ ）、大きい効果量が得られた。残差分析の結果、本意で第一志望（ $p<.001$ ）、まあ本意で第二志望（ $p<.001$ ）、やや不本意で第三志望（ $p<.001$ ）、不本意でそれ以下（ $p<.001$ ）の人数が有意に多く、本意で第二志望（ $p=.011$ ）、第三志望（ $p<.001$ ）、それ以下（ $p=.01$ ）、まあ本意で第一志望（ $p=.00$ ）、やや不本意で第一志望（ $p<.001$ ）、不本意で第一志望（ $p=.04$ ）の人数が有意に少なかった。

人数の分布とカイ二乗検定の結果から、分析の際に浪人経験についてはある人とない人に分類、志望順位については第一志望とそれ以外に分類、入試区分においては推薦入試と一般入試に分類、本意度については本意と本意以外に分類し、本意を選択した者を本意入学者、本意以外を選択した者を不本意入学者として分析を行うこととした。

表6 本意度と志望順位を組み合わせた人数（N=98）

変数名	本意度			
	本意 (N=39)	まあ本意 (N=34)	やや不本意 (N=17)	不本意 (N=8)
第一志望	△36**	▼10*	▼0**	▼1*
第二志望	▼3*	△14**	3	0
第三志望	▼0**	9	△12**	1
それ以下	▼0*	1	2	△6**

△：有意に多い、▼：有意に少ない ** $p<.01$ * $p<.05$

相関行列

表7は、浪人経験、入試区分、志望順位、本意度、大学受験の捉え方の下位尺度、学校適応感の下位尺度間の相関係数を示したものである。学校適応感と志望

表7 各尺度の相関行列

	大学受験の経験				大学受験の捉え方				学校適応感					
	浪人経験	入試区分	志望順位	本意度	達成・成長経験	後悔経験	無意味経験	苦痛経験	遠い過去経験	居心地の良さの感覚	課題・目的的存在	被信頼・受容感	劣等感の無さ	学校適応感総得点
大学受験の経験														
浪人経験	1.00													
入試区分	.20*	1.00												
志望順位	.07	.58**	1.00											
本意度	.12	.51**	.72**	1.00										
大学受験の捉え方														
達成・成長経験	.04	.22*	.20*	.40**	1.00									
後悔経験	-.14	-.34**	-.36**	-.44**	-.35**	1.00								
無意味経験	-.04	.00	.01	-.13	-.66**	.10	1.00							
苦痛経験	-.06	-.32**	-.41**	-.40**	-.39**	.49**	.38**	1.00						
遠い過去経験	.10	-.06	.08	-.01	-.38**	.20*	.42**	.21*	1.00					
学校適応感														
居心地の良さの感覚	.08	.16	.30**	.37**	.42**	-.23*	-.30**	-.33**	-.14	1.00				
課題・目的的存在	.02	.14	.34**	.43**	.51**	-.13	-.37**	-.27**	-.02	.76**	1.00			
被信頼・受容感	.08	.15	.16	.24*	.39**	-.17	-.20*	-.21*	-.09	.74**	.58**	1.00		
劣等感の無さ	-.17 ⁺	-.16	.12	.19 ⁺	.27**	-.20*	-.30**	-.39**	-.21*	.42**	.31**	.32**	1.00	
学校適応感総得点	.03	.12	.30**	.39**	.49**	-.23*	-.35**	-.36**	-.13	.95**	.84**	.83**	.57**	1.00

** $p < .01$ * $p < .05$ ⁺ $p < .10$

順位, 本意度および大学受験の捉え方の達成・成長経験は正の相関が, 大学受験の捉え方の後悔経験, 苦痛経験は負の相関が見られた。また, 入試区分, 志望順位および本意度と大学受験の捉え方の達成・成長経験は正の相関が, 大学受験の捉え方の後悔経験, 苦痛経験は負の相関が見られた。

本意入学者と不本意入学者の尺度得点の差の検討

学校適応感のうち, 居心地の良さの感覚 ($t(90.95) = 4.03, p < .001, d = 0.80, 95\% CI [0.38 - 1.21]$), 課題・目的の存在 ($t(95.36) = 5.01, p < .001, d = 0.96, 95\% CI [0.54 - 1.38]$), 被信頼・受容感 ($t(90.63) = 2.51, p = .01, d = 0.50, 95\% CI [0.09 - 0.10]$), 学校適応感総得点 ($t(89.59) = 4.27, p < .001, d = 0.85, 95\% CI [0.43 - 1.27]$) は本意入学者の得点のほうが本意以外の入学者の得点よりも有意に高く, 中程度~大きい効果量が得られた。また, 劣等感の無さは, 本意入学者の得点と本意以外の入学者の得点の差に有意傾向が示され, 中程度の効果量が見られた ($t(75.78) = 1.90, p = .06, d = 0.40,$

$95\% CI [-0.01 - 0.80]$)。すなわち, 居心地の良さの感覚, 課題・目的の存在, 被信頼・受容感, 学校適応感総得点は, 本意入学者の方が本意以外の入学者よりも有意に高いことが示された。

本意度に関連する要因の検討

本意度に関連する要因について検討するために, 本意度を目的変数とした重回帰分析を行った。

まず, 性別・浪人経験の有無・入試区分・志望順位を説明変数とした重回帰分析を行った(表9)。その結果を表9に示す。分析の結果, 性別と志望順位の主効果は本意度を有意に説明していた ($R^2 = .55$; 性別: $b = -0.14, SE = 0.07, \beta = -.14, t(92) = 2.03, p = .05$; 志望順位: $b = 0.65, SE = 0.08, \beta = .67, t(92) = 7.74, p < .001$)。浪人経験の有無, 入試区分については, 影響が見られなかった。

続いて, 入学理由を説明変数とした重回帰分析を行った(表10)。分析の際, 親からの勧め, 興味関心有については, 件数が10を下回っていたため, 除外し

表8 大学受験の捉え方と学校適応感のt検定の結果 (N=98)

変数名	本意 (N=39)	本意以外 (N=59)	t	df	p	d
大学受験の捉え方						
達成・成長経験	3.95 (0.75)	3.24 (0.85)	4.34	88.57	$p < .001$	0.86
後悔経験	2.99 (0.94)	3.85 (0.82)	4.66	73.46	$p < .001$	0.98
無意味経験	2.10 (0.70)	2.31 (0.82)	1.35	89.92	.18	0.27
苦痛経験	2.26 (0.83)	3.03 (0.91)	4.30	86.45	$p < .001$	0.86
遠い過去経験	2.88 (1.04)	2.90 (0.95)	0.07	76.48	.95	0.01
学校適応感						
居心地の良さの感覚	3.87 (0.73)	3.21 (0.88)	4.03	90.95	$p < .001$	0.79
課題・目的の存在	4.26 (0.56)	3.58 (0.78)	5.01	95.36	$p < .001$	0.96
被信頼・受容感	3.14 (0.78)	2.70 (0.93)	2.51	90.63	.01	0.50
劣等感の無さ	3.78 (0.72)	3.51 (0.65)	1.90	75.78	.06	0.40
学校適応感総得点	3.80 (0.57)	3.25 (0.67)	4.27	89.59	$p < .001$	0.85

※ () 内は標準偏差を表す

表9 重回帰分析の結果

変数名	本意度		
	b	p値	β
切片	0.04	.77	
性別	-0.14	.05	-.14
浪人経験	0.08	.59	.04
入試区分	0.10	.27	.10
志望順位	0.65	$p < .001$.66
決定係数 (R^2)	.55	$p < .001$	
調整済み R^2	.53		

b: 偏回帰係数, β: 標準化偏回帰係数

表10 重回帰分析の結果

変数名	学校適応感総得点		
	b	p値	β
切片	0.48	$p < .001$	
第一志望不合格	-0.43	$p < .001$	-.43
合格可能性高	0.12	.22	.12
資格・就職有利	0.34	.00	.29
家庭の事情	-0.03	.73	-.03
決定係数 (R^2)	.40	$p < .001$	
調整済み R^2	.37		

b: 偏回帰係数, β: 標準化偏回帰係数

た。入学理由のうち、第一志望不合格と資格・就職有利は、本意度を有意に説明していた ($R^2=.40$; 第一志望不合格: $b=-0.43, SE=0.10, \beta=-.43, t(93)=4.19, p<.001$; 資格・就職有利: $b=0.34, SE=0.11, \beta=.29, t(93)=2.96, p=.00$)。合格可能性高、家庭の事情については、影響が見られなかった。

本意度と大学受験の捉え方が学校適応感に及ぼす影響の検討

本意度と大学受験の捉え方を説明変数、学校適応感の総得点を目的変数とした重回帰分析(強制投入法)を行った。その結果のVIFの値が一部2を超えていたため、重回帰分析(ステップワイズ法)を用いて学校適応感の総得点に影響している要因を抽出することにした。

学校適応感総得点を目的変数、本意度と大学受験の捉え方を説明変数とした重回帰分析(ステップワイズ法)を行った(表11)。分析の結果、Step1では、達成・成長経験 ($b=0.31, \beta=.49, p<.001$)、Step2では本意度 ($b=0.32, \beta=.23, p=.02$) が抽出された。

ステップワイズ法で抽出された、達成・成長経験と本意度および達成・成長経験と本意度の交互作用項を説明変数、学校適応感の総得点を目的変数とした重回帰分析を行った(表12)。重回帰分析の結果、本意度と達成・成長経験の主効果は学校適応感総得点を有意に説明していた ($R^2=.29$; 本意度: $b=0.34, SE=0.14, \beta=.25, t(94)=2.54, p=.01$; 達成・成長経験: b

表11 重回帰分析(ステップワイズ法)の結果

変数名	学校適応感総得点		
	b	p値	β
達成・成長経験	0.31	$p<.001$.49
本意度	0.32	.02	.23
決定係数 (R^2)	.28	$p<.001$	
調整済み R^2	.27		

b: 偏回帰係数, β: 標準化偏回帰係数

表12 重回帰分析の結果

変数名	学校適応感総得点		
	b	p値	β
切片	3.49	$p<.001$	
達成・成長	0.30	$p<.001$.39
本意度	0.34	.01	.25
達成・成長*本意度	-0.10	.52	-.06
決定係数 (R^2)	.29	$p<.001$	
調整済み R^2	.26		

b: 偏回帰係数, β: 標準化偏回帰係数

$=0.30, SE=0.15, \beta=.39, t(94)=4.04, p<.001$)。本意度と達成・成長経験の交互作用項については影響が見られなかった。

交互作用項は有意ではなかったが、松田・三宅・橋本・山崎・森田・小嶋(2002)は下位検定を行うことが研究の主目的の条件である場合、交互作用が見られていなくても、下位検定を行う場合があると述べている。本研究では本意度と大学受験の捉え方が学校適応感に及ぼす影響を検討することが主目的であるため、単純傾斜分析を行った。

図1は、単純傾斜分析の結果である。本意入学者には達成・成長経験の効果は見られなかったが ($b=0.18, SE=0.17, t(94)=1.49, p=.14$)、不本意入学者では達成・成長経験がより学校適応感を高めていた ($b=0.31, SE=0.21, t(94)=2.03, p=.05$)。また、不本意入学者で達成・成長経験が高い場合は、本意入学者で達成・成長経験が低い場合と、学校適応感の得点に有意な差が見られず、同程度であると示された ($t(194)=0.86, p=.39$)。

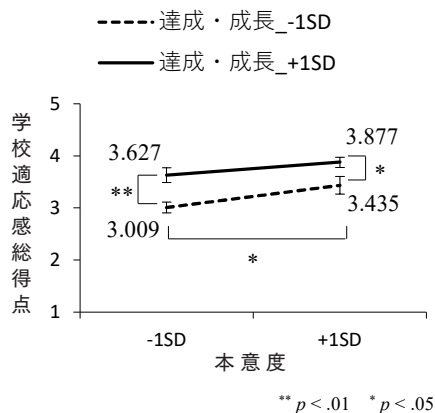


図1 単純傾斜分析の結果

考 察

本研究の目的は、在籍する大学に対する入学時の本意度と大学受験の捉え方が学校適応感に及ぼす影響について、本意度に影響を与える要因もあわせて検討することであった。

本意度に関連する要因

分析対象者の本意度と志望順位には有意な関連が見られた。竹内(2020)は、不本意入学者について、第一志望が不合格である人を不本意入学者と決めること

には疑念が残ると述べている。しかし、本研究では本意度と志望順位の有意な関連が示され、残差分析の結果、本意と第一志望、まあ本意と第二志望、やや不本意と第三志望、不本意とそれ以下という組み合わせにおいて、有意に人数が多くなっていた。さらに、まあ本意、やや不本意、不本意それぞれと、第一志望の組み合わせにおいて、有意に人数が少なくなっていた。これらの結果は、第一志望ではない新生を不本意入学とみなす大隅他（2013）を支持するものであると考えられる。

本意入学者は不本意入学者と比べて、大学受験を達成・成長経験と捉えており、不本意入学者は後悔経験、苦痛経験と捉えていることが示された。本意入学者が大学受験を自分自身の成長と捉えやすく、不本意入学者は大学受験に対して後悔し、苦痛な経験であったと捉えやすいことは、不本意入学の定義とも一致している。

学校適応感においては、本意入学者のほうが不本意入学者より適応が良いことが示された。これは、不本意入学が学校不適応の要因となっているという山田（2006）の知見と一致している。

また、重回帰分析の結果から女性のほうが本意であること、志望順位が高いほど本意であることが示された。しかし、性別の影響はそこまで大きくはなかった。国立大学における不本意入学者の実態について調査を行った小林（2021）では、性別による偏りは見られていない。A大学は私立大学であるが、不本意入学において性別の影響はほとんどないと言える。志望順位の影響については、第一志望であれば本意であるということが示され、小林（2021）と同様の知見が得られた。

一方で、浪人経験の有無や入試区分の影響は見られなかった。本調査の調査協力者の多くは、浪人経験がないものであったため、浪人経験が本意度に影響を及ぼさなかったと考えられる。また、浪人経験の有無は、受験大学や学部によって異なると予測できる。そのため、浪人経験が多い学生が集うような大学や学部を対象にした調査が今後必要であると言える。入試区分について、小林（2021）では、入試方式と志望順位のクロス分析の結果より、一般入試は推薦・AO入試と比較して、より多くの不本意入学者を発生させていることが示されている。本研究でも、入試区分と本意度の相関係数は $r=.51$ となっており、中程度の正の相関を示している。しかし、入試区分と志望順位で $r=.58$ 、本意度と志望順位で $r=.72$ という中程度の相関を示している。そのため、志望順位と入試区分を同時に説明

変数として分析した場合、志望順位の影響が強く出たことで、入試区分の影響が見られなかったと考えられる。

入学理由においては、第一志望校に不合格であったという理由が本意度に負の影響を及ぼし、資格や就職に有利であるという理由が本意度に正の影響を及ぼしていた。前述した志望順位が本意度に及ぼす影響と合わせて考えると、本意度に関して志望順位が重要な指標となっていることが窺える。これは、大隅他（2013）の第一志望の大学に合格できなかった者は、入学時点において基本的に不本意入学とみなすことができるという主張を支持するものであると言える。また、資格取得や就職に有利であるという理由は、積極的な進学理由であると考えられる。佐藤（2001）は進学動機が大学での適応を導くことを示している。大学入学の理由が前向きなものであると、本意度に正の影響を及ぼすと考えられる。本研究で尋ねた入学理由は、小林（2000）が不本意入学である学生の類型を分類したものを使用している。しかし、全ての入学理由が本意度に負の影響を及ぼしているわけではなかった。正の影響を及ぼした資格取得や就職に有利であるという理由で大学に進学したとしても、資格を取ろうという積極的な気持ちで進学したのか、とりあえず資格が取れるから進学しようという消極的な気持ちで進学したのかにより、本意度への影響は変化すると考えられる。これらの結果から、不本意入学の学生について考えるときには、個人が大学入学時にどのような気持ちを持って進学したのが重要であるということが推測できる。

学校適応感と大学受験の捉え方

学校適応感に影響を及ぼす要因として、本意度と大学受験の捉え方のうち達成・成長経験が選択され、達成・成長経験のほうが本意度よりも学校適応感に大きい影響を及ぼしていることが示された。さらに、不本意入学であったとしても、大学受験を達成・成長経験であると捉えていれば学校適応が良い可能性が示された。

また、本研究の相関分析の結果、達成・成長経験とその他の大学受験の捉え方との間には、有意な負の相関があると示された。加えて、学校適応感の尺度得点においても、達成・成長経験とは正の相関を示しており、その他の捉え方は負の相関を示している。これらの結果から、大学受験に対してネガティブな捉え方をしていると学校適応が悪い傾向があり、ポジティブな捉え方をしていると学校適応が良い傾向があると示唆

された。

樋山・林田・東谷・廣瀬・香川（2018）は、ストレスに対して自己成長を促すものであると捉えると、ストレスの心理的反応が抑制される可能性を示唆している。また、尾崎・上野（2001）では過去の経験が現在に与える影響について大学生を対象に調査をしている。調査内容は過去の目標（自由記述）、その目標の達成度、その目標が達成できた（あるいはできなかった）ことが現在の自身に与える影響に関して、プラス面・マイナス面の両面の影響内容の記述および、総合的に見て自分にとってプラスの影響かマイナスの影響かについての評価を尋ねている。その結果、目標達成に失敗した場合でも、現在にプラスの影響を持つと評価する場所が見られた。加えて、目標達成に失敗した場合のプラスの影響として、性格・考え方がよい方に変化したなどの記述が見られたと報告している。さらに達成・成長経験の項目は、大学受験に対して達成感を抱き、自分の成長していることを表す項目で作成されている（堀井，2018）。つまり、大学受験で失敗して第一志望ではない大学に入学したとしても、大学受験を成長につながるものであると捉えることが個人にプラスの影響を及ぼすと考えられる。そして、「大学受験に合格できなかった」という心理的ストレスが抑制され、学校適応に繋がった可能性がある。

今後の課題と展望

今後の課題として学校不適応を起こす大学生は、大学受験をどのように捉えているのかも検討する必要があると言える。本研究では、学校適応感に影響する大学受験の捉え方として、達成・成長経験のみが選択された。これは、使用した尺度が学校不適応ではなく、学校適応感を測定する尺度であったためこのような結果になった可能性も考えられる。学校不適応の傾向を測る尺度を使用した場合は、他の捉え方の影響が出る可能性も考えられるため、今後検討が必要である。

さらに、今後の展望として、大学受験を達成・成長経験だと捉えていない学生に対する支援を行う必要がある。可能な支援として、学校適応感に直接働きかける支援と、大学受験を達成・成長経験であると捉えられるように働きかける支援があると考えられる。大学新入生に対する予防的支援は、初年次教育の中で行われることが多い（安達・安達，2019），初年次教育でどのような取り組みを行えば良いかを、考える必要がある。

中村・松田（2012）は、学校適応を説明する基本要因として、「入学目的」「友人関係」「授業理解」の3つ

を挙げている。学校適応に介入する方法として、この3つの要因に着目した初年次教育を行うことが考えられる。具体的には、初年次教育の中で友人を作りやすい環境を提供すること、グループワークを取り入れることなどが考えられる。また、大学の授業は高校までの授業と異なり、内容が難しくなっている。さらに、教員一人に対して受講生が多い講義形式の授業が増える。そのため、授業を本当に理解しているのかという確認は難しいと予想できる。授業のやり方や授業理解の確認の機会を設けることによって、学校適応が促進される可能性は考えられるが、具体的な方法についてはこれから検討していく必要があると考えられる。

また、堀井（2021）は自分に対する思いやりを持った関り方を表す「セルフコンパッション（self-compassion：SC）」により、大学受験のとらえ方が否定的ではなくなる可能性を示唆している。SCは、何らかのネガティブな出来事の体験から生じる苦痛を緩和することを目指した自己との関り方であり、介入によって高まる可能性が示されている（宮川・谷口，2016）。そのため、SCを高めることは、第一志望の大学に合格できなかったことによる苦痛の緩和につながるものが予想される。SCを高める介入研究では、SCの概念説明や、参加者に自分なりの自己を思いやり、慈しむフレーズや文章を考えさせる課題が課されている（宮川・谷口，2016）。今後は、このような介入研究を参考にSCを高める取り組みを、大学の初年次教育で取り入れていくことが提案できる。

引用文献

- 安達 知郎・安達 奈緒子（2019）. 大学新入生に対するアサーション・トレーニングの効果：—適応感とアイデンティティ、自己受容に注目して— 教育心理学研究, 67, 317-329.
- 東 美絵（2004）. 受験不安と健康について—ソーシャルサポートとの関連から— 臨床教育心理学研究, 30, 39-51.
- 千葉 柝作（2020）. ネガティブな体験後の心理的成長に関わる概念の文献的検討 北大学大学院教育学研究科研究年報, 69, 121-132.
- Colhoun, L. G. & Tedeschi, R. G. (2006). Handbook of Posttraumatic Growth – Research and Practice, London, UK: Routledge (カルホーン, L. G.・テデスキ, R. G. 宅 香菜子・清水 研 (監訳) (2014) 心的外傷後成長ハンドブック：耐え難い体験が人の心にもたらす

もの 医学書院)

- 樋口 康彦 (2007). 大学生の適応に影響を与える要因に関する考察 国際教養学部紀要 3, 97-102.
- 樋山 雅美・林田 真理砂・東谷 真帆・廣瀬 眞波・香川 香 (2018). 大学生におけるストレスの肯定的認知と精神的健康の関連 Psychologist: 関西大学臨床心理専門職大学院紀要, 8, 11-19.
- 堀井 順平 (2018). 大学生の大学受験の捉え方と自己効力感の関連 広島大学大学院教育学研究科紀要第一部 学習開発関連領域 67, 39-46.
- 堀井 順平 (2021). 大学受験のとらえ方の変容に必要なセルフコンパッションの働き: 新型コロナウイルスの状況下における検討 日本教育心理学会総会発表論文集, 63, 314.
- 小林 元気 (2021). 国立大学における「不本意入学」の実態: 入試形態・ジェンダー・学部・大学階層に着目して 関西教育学会年報, 45, 131-135.
- 小林 哲朗 (2000). 大学・学部への満足感. 小林 哲朗・高石 恭子・杉原 保史 (編) 大学生がカウンセリングを求めるとき ミネルヴァ書房.
- 松田 文子・三宅 幹子・橋本 優花里・山崎 理央・森田 愛子・小嶋 佳子 (2002). 心理学における初歩的統計使用の要注意事項集 広島大学大学院研究科紀要 第三部 171-180.
- 松高 由佳 (2017). 大学生の不登校に関する要因の検討 広島文教女子大学心理臨床研究, 7, 1-8.
- 三浦 麻子・小林 哲郎 (2018). オンライン調査における努力の最小限化が回答行動に及ぼす影響 行動計量学, 45, 1-11.
- 宮川 裕基・谷口 淳一 (2016). セルフコンパッション研究のこれまでの知見と今後の課題: 困難な事態における苦痛の緩和と自己向上志向性に注目して 帝塚山大学心理学部紀要, 5, 79-88.
- 宮田 かな恵 (2015). 大学受験期における困難感の対処プロセスの検討及び不本意入学がその後の人生に与える影響 人間科学研究 Supplement, 28, 90.
- 文部科学省 (2014). 学生の中途退学や休学等の状況について https://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/26/10/_icsFiles/afieldfile/2014/10/08/1352425_01.pdf (2021年2月25日)
- 文部科学省 (2021a). 学校基本調査 / 年次統計 進学率 <https://www.e-stat.go.jp/stat-search/files?page=1&layout=datalist&toukei=00400001&tstat=000001011528&cycle=0&tclass1=000001021812&tclass2val=0>

(2021年2月28日閲覧)

- 文部科学省 (2021b). 令和2年度国公立大学入学者選抜実施状況 https://www.mext.go.jp/content/20210330-mxt_daigakuc02-000013863_1.pdf (2021年1月28日閲覧)
- 文部科学省 (2021c). 令和2年度公立短期大学入学者選抜実施状況 https://www.mext.go.jp/content/20210330-mxt_daigakuc02-000013863_2.pdf (2021年1月28日閲覧)
- 文部科学省 (2021d). 新型コロナウイルスの影響を受けた学生への支援状況等に関する調査 https://www.mext.go.jp/content/20210216-mxt_kouhou01-000007001-1.pdf (2021年2月26日閲覧)
- 中村 真・松田 英子 (2012). 大学生の学校適応に影響する要因の検討 江戸川大学紀要, 23, 151-160.
- 野波 侑里・近藤 伸彦・玉本 拓郎 (2012). 初年次生の大学生活への適応に関する調査報告 (1) 大手前大学論集, 12, 227-243.
- 大久保 智生 (2005). 青年の学校への適応感とその規定要因—青年用適応感尺度の作成と学校別の検討— 教育心理学研究, 53, 307-319.
- 大隅 香苗・小塩 真司・小倉 正義・渡邊 賢二・大崎 園生・平石 賢二 (2013). 大学新入生の大学適応に及ぼす影響要因の検討: 第1志望か否か, 合格可能性, 仲間志向に注目して 青年心理学研究 24, 125-136.
- 尾崎 仁美・上野 淳子 (2001). 過去の成功・失敗経験が現在や未来に及ぼす影響—成功・失敗経験の多様な意味— 大阪大学大学院人間科学研究科紀要, 27, 63-87.
- 佐藤 典子 (2001). 音楽大学への進学理由の認知と進学後の適応について 教育心理学研究, 49, 175-185.
- 清水 裕士 (2016). フリーの統計分析ソフト HAD: 機能の紹介と統計学習・教育, 研究実践における利用方法の提案 メディア・情報・コミュニケーション研究, 1, 59-73.
- 竹内 正興 (2020). 現代の大学入試における不本意入学者 佛教大学大学院教育学研究科博士論文 (未公開).
- 富田 吉敏・菊池 裕絵・安藤 哲也 (2017). 受験生と心療内科: ストレスを抱える受験生への心療内科的対応— 心身医学, 57, 849-855.
- 山田 ゆかり (2006). 大学新入生における適応感の検討 名古屋文理大学紀要, 6, 29-36.

The Influences of the Perceptions of University Entrance Examinations on the sense of School Adjustment

-Focusing on Unwilling Admission-

AYUMI SHINBATA (*Graduate school of Psychology, Kurume University*)

MASAHIRO HARAGUCHI (*Department of Psychology, Faculty of Literature, Kurume University*)

RINA EMURA (*Department of Psychology, Faculty of Literature, Kurume University*)

Abstract

This study investigated students' level of willingness to enroll in university and how perceptions of university entrance examinations influence school adjustment. A total of 98 first-year university students completed a web survey that included items on their experiences with university entrance examinations, whether they willingly enrolled at their university, perceptions of university entrance examinations, and school adjustment. This survey was conducted in July 2021. The results of the multiple regression analysis revealed level of willingness and achievement/growth experience were selected as factors affecting the students' sense of school adjustment. Furthermore, the results of simple slope analysis showed even students who unwillingly enrolled in university may be able to adjust better to school by perceiving university entrance examinations as a step towards personal growth.

Keywords: unwilling enrollment, school adjustment, perceptions of university entrance examinations